

## 書 評

野口啓子・山口ヨシコ編著

# 『アメリカ文学にみる女性と仕事 —ハウスキーパーからワーキングガールまで—』

鶴 野 ひろ子

本書は津田塾大学の「アメリカ文学女性像研究会」が1999年に発表した『ヒロインから読むアメリカ文学』（勁草書房）に引き続いて、13名のメンバーがそれぞれの研究成果を発表したものである。前著において示された「異端として周縁に追いやられていた女性作家」を「女性の視点で読み直す」という姿勢は変わっていないが、本書は特に、「女性と仕事」というキーワードで「アメリカ文学再考」を試みたもので、主として19世紀ヴィクトリア朝時代から世紀転換期にいたる間の、保守的な家庭小説から20世紀初頭の労働運動にラディカルに関わった女性の自伝まで、多種多様な作品を扱っている。これまでのアメリカ女性像についての研究の多くは、「女性を家父長との対立構造においてとらえ、父権制の犠牲者としてネガティヴに位置付けているように思われる」が、本書は、「その限られた世界でいかに女性たちが格闘し、働き、生産し、創造的な生を生きようとしたのか、文学作品をとおして検証」するものである。

本書は大きく3部に分かれていて、第一部は「誇り高きハウスキーパーから女性芸術家へ」と題され、特に、家庭との葛藤を扱っている。

藤井久仁子は「『理想の家庭婦人』になるために」という章で、19世紀半ばにベストセラーとなった「家庭小説」の代表作であるスーザン・ウォーナーの『広い、広い世界』（1850）を扱い、この小説が「信仰をとおして、自制心、忍耐力、人への思いやり、そして克己心を身に着け」、「家事の技術を習得し、教

養を高め、社交術を身につける」ことが当時の「理想の家庭婦人像」であったことを示していると、論じている。

野口啓子が取り上げたキャロライン・カーランド著『新しい家庭 続くのはだれ? あるいは西部生活瞥見』(1839)は、東部中産階級出身の女性が西部開拓地での経験を手紙形式で書きつづったものであるが、開拓地での苛酷な経験が非常にリアルに描かれているため、それがそれまでの「感傷的な家庭小説に対する批判となって」いる。さらには、「男性作家のロマンティックな冒険物語を否定すると同時に、そのような先行文学によって培われたフロンティア像の修正を予示」し、「ロマンスが支配的だったルネッサンス期アメリカ文学の一角に、リアリズム文学」が既に誕生していたことを示しているとも言う。

黛道子の取り上げたローラ・インガルス・ワイルダーの『小さな家』シリーズは、子供の視点から書き始められたこと、出版されたのが1930年代ということもあって、19世紀後半の開拓地の生活がノスタルジックに描かれている。また主人公のローラが大人になって社会に出て苦勞の末学んだことは「自分への信頼とあらたに見出した家庭の価値」だったという。

前田陽子が「結婚した画家のアンビヴァレンス」で取り上げたエリザベス・フェルプスは、アカデミックな家庭に育ったが、日曜学校の教師として工場で働く女性労働者の悲惨な生活を見て、社会改革運動に取り組んだジャーナリストである。しかし小説『エイヴィスの物語』(1877)で、彼女は「芸術への情熱と家庭の要求との間で苦しむ女主人公のジレンマを辛辣に」描いたが、結局「家庭を犠牲にして芸術を追及するという選択肢は与えなかった」。前田は「時代の制約を強く意識せずにはいられない」が、「1870年代において、自分の才能を伸ばそうとする女性に対して、結婚生活がいかに多くの犠牲や代償を要求するかを提示したこの作品の意義は大きい」と結んでいる。

渡辺玲子が取り上げたウィラ・キャザーの『ひばりの歌』(1915)の主人公は、女性の活動範囲は家庭だとする社会の中で、当時唯一女性に開かれていた職業であったオペラ歌手となって、当時の「フェミニストたちの一つの重要な

勝利」を獲得する。しかしその後結婚することによって、「その座を奪われる」という、皮肉な結末が示すように、「当時の制約を感じざるを得ない」。

第二部は「南部を証言する女たち—農園主夫人・女性奴隷・女性農園主」として、これまでほとんど知られていなかった南部の女性作家の作品を紹介している。

須藤彩子の論じる『ジョージア州プランテーション滞在記録』は、結婚した相手が農園を受け継ぐこととなり、自らがはからずも奴隷農園主夫人となった英国人女優フランシス・ケンプルが、実際の体験をまとめ、1863年に出版したものである。奴隷からも押し付けられる農園主夫人としての役割を全うしようとする努力の中で、自分自身が嫌悪している奴隷制度に養われていることに悩み、やましい思いをせずに食べていくために働くことの重要性を痛感する姿が描かれている。苦闘の末、彼女は北部に戻り俳優業を再開し、この体験記を出版することにより奴隷制に反対する姿勢を明らかにする。これは「一人の女性が、社会のなかで与えられた役割に振りまわされ、とまどいながらも職業意識を確立し実践していく記録」としても読めると、須藤はいう。

種子田香は「アメリカ南部の大農園主の妻でさえ、奴隷制に反対していることを世に知らしめた衝撃的な文献」として、メアリー・チェスナットの日記を紹介している。19世紀後半、農園主は何人もの黒人奴隷の女性と肉体関係を持つことが黙認されていたが、一方、農園主の妻は家父長制のもと、外出もままならず、孤独やストレスのため、麻薬を鎮痛剤として使用することは珍しくはなかった。彼女は「奴隷制は不潔なことだと忌み嫌い、義父、ひいてはすべての男性の道徳の低下をもたらしていると」嘆いている。しかし一方で、彼女の日記には「南部上流階級の白人社会の価値観も色濃く反映」されていた。特に彼女は「黒人女性の立場に対してあまりにも無理解であった」。しかし「奴隷所有者である男性との結婚生活を維持」するには、「無理解のままである」ことが必要であったのだろうと、そしてそのような「限界は、時代や制度の限界」でもあったのだと、種子田は言う。

宮津多美子の取り上げたハリエット・ジェイコブズの『ある奴隷娘の生涯で起こった出来事』(1861)は、「奴隷主に性的嫌がらせを受け……また屋根裏での約7年間もの隠遁生活に耐え……北部に逃れ、自由を勝ちとった」元奴隷の「黒人」女性の自伝的小説である。過酷な労働の中で教育の重要性を実感した彼女が、経済的自立を果たした後に「黒人のための学校を設立した」ことや、ストー夫人など白人女性を書いた物語には「黒人女性の『真実』はない」ことを学んだことが記されている。

エレン・グラスゴーの『不毛の大地』(1925)は大農園主として成功した白人女性を描いた小説であるが、主人公は「伝統的価値観からすれば『墮ちた女』として社会から葬られる状況から自己実現をめざして立ちあがった女性として描かれていて、それまでのグラスゴーの女性像とは一線を画している」と、藤野早苗はいう。「結婚に脱出の夢を託すのは、いわば他力本願であったことに」気づいた主人公は、「人生には愛以外にも何かがあるはずだ」と考えて、不毛の大地の再生に挑戦する。そして「伝統的に『愛』という名のもとに、『家政婦』として、また子孫繁栄の道具として使われてきた南部レディが、自分を主体に考え、夫を『上級雇い人』として農場経営の発展のために尽力させよう」とまでする。藤野は「ドリンドラを結婚させたのは、女性一人の農場経営には社会的制約があるという現実認識がグラスゴーにあったからに違いない」という。

第三部では、「都市で働く女たち—賃金労働から女性の連帯へ」と題して、3つの小説と1つの自伝が扱われている。

都会の底辺で「移民女性」が「階級とジェンダーという二重の疎外を受けて」いたことを知らしめるのは、伊藤淑子の論文「『醜い』女工の美しい秘密」である。そこで取り上げている、レベッカ・ハーディング・デイヴィス著『製鉄工場における生活』(1861)について、伊藤は「デイヴィスの現実的な洞察力は、労働に消耗されるだけの日々を過す人間にとって」、「権利という概念」がむしろ「残酷なものである」ことを見抜いていた、という。「『権利意識』よりも信仰のほうが、より現実的な救い」だったとも論じている。

羽澄直子はルイザ・メイ・オルコットの『仕事』(1873)を取り上げている。主人公が「自らの可能性を試すために一人ボストンへ行き、さまざまな職業経験をとおして人生勉強を重ねる」物語である。主人公は作者自身経験したこともある「家政婦」、「女優」、「家庭教師」、「話し相手」、「お針子」を経験するが、これらは19世紀半ばのアメリカで「若い女性が都会で得られる」限られた職種であった。しかしどの職業も、主人公が切望する「やりがいのある」仕事にはなりえず、転々と職業を変えた後、「貧困と孤独に苦しみ抑うつ状態に陥る」。当時、多くの若い女性が工場に働いていたにもかかわらず、オルコットは主人公にそれをさせなかったが、これは彼女の「認識では、工場労働は下層の移民向けの仕事であり、生粋のアメリカ女性、ましてや中産階級の女性がつくべきものではなかった」からだという。主人公はやがて「労働とは慈愛の気持にもとづく行為で、愛する者のために奉仕することを意味する」と思うようになり、家族のために尽くす主婦の仕事にも意義を見出し、結婚する。しかし南北戦争中には、従軍看護師として、別居をしてでも働くこととなる。そして夫の死後、「資産、独立、天職を手に入れた彼女は、もはや男性に依存する必要」はなくなり、娘や女性の友人たちに囲まれて、「労働者階級と有閑階級の女性たちの架け橋となる、女性の地位向上のための社会改革運動」に身を捧げる。「妻であり、母であり、未亡人である」彼女は「当時の女性らしさの規範を超えない程度」で、「新しくはないが規制の路線とは少し異なる」生き方の「提案」をしたのだと、羽澄は結論付けている。

山口ヨシ子を取り上げたドロシー・リチャードソンの『長い一日』(1905)は、イーディス・ウォートンの『国の慣習』の男性の主人公がウォール街で巨万の富を得ると対照的に、20世紀初頭のニューヨークが、貧しい地方出身の若い女性にとって、夢の実現の場であるどころか、「破滅への危険をも秘めた『邪悪な都市』」であったことを描いている。『長い一日』では、新聞記者であった中産階級出身の作者が「自ら取材のため潜入体験した女子労働者の生活」が、『私』の体験として描かれていて、「大都会の底辺で働く貧しい女性たちの

生活がリアルに描写され、問題点が分析されている」。そこでは、「利潤最優先の機構のなかで女性労働者が使い捨ての道具のように扱われ」、男性上司からはセクシャル・ハラスメントを受ける可能性も高い。そのような現実を見た作者は、「働く女性たちの連帯」を提唱する。しかし彼女自身は中産階級出身の教養ある女性であったがため、「労働条件などの改善案においても、中産階級の視点が強く前面に押し出され」、現実性のないものであった。それは「当時の超えがたい階級の壁を示し、女性労働問題の解決の困難さを物語っている」。さらに、「キャリア・ウーマンとして働き続けるヒロインよりも、結婚して主婦となった親友の方を成功者として位置づけるところ」は、「当時の中産階級層の声を反映したものであるが、『長い一日』の出版から百年を経た今日、社会と働く女性の意識のなかで、この問題はどれだけ解決しているだろうか」と、山口は読者に問いかけている。

労働力は「商品とみなされ」、利用価値がなくなれば、捨てられてしまう。労働者は「産業奴隷」とも言える存在であった。そのような労働者の苦境を救うため、男性に交じって生涯をささげ、「マザー・ジョーンズ」と呼ばれた女性の自伝（1925）を紹介しているのが、梅垣代枝野の『『もっとも危険な女』の生涯』である。ジョーンズはアイルランドに生まれ、ジャガイモ飢饉後、北アメリカに移住した。彼女は移民の女性として苦労を経たのち結婚するが、夫や子供も疫病で失ってしまう。そのように次々襲ってくる悲劇のなかで、彼女はより苦しむ人々を助けるため、労働運動家として活躍するようになる。梅垣によれば、彼女には「中産階級の女性たちの慈善活動は、自己満足にしか映らなかった」。彼女は貧しい労働者の家庭を守ろうとした。彼女の「女性観は、一見、古めかしい家庭中心の考え方である」が、他の女性たちを巻き込んでいくその活動の中で、彼女たちに「社会参加の意義と自らの能力への自信を教えたはずだ」と、言う。「家長長制の要求する『女らしさ』を脱却して」、「法廷からは『もっとも危険な女』とみなされ、抗夫からは『守護天使』といわれた」彼女の存在は、「男女の差と貧富の差という二分化した19世紀から、近代的平

等の概念へと移る、一つの橋渡しとなったとも考えられる」と、梅垣は言う。

さてこれまで見てきたように、本書では、アメリカ文学史にこれまで扱われなかった、無名であるが興味深い女性たちの作品が数多く紹介されていて、アメリカ文学の新たな素顔を見せてくれる。19世紀から20世紀にかけてのアメリカの様々な姿を反映させている作品ばかりであるというのに、*Norton Anthology of American Literature* ですら、この内の1冊も紹介していないということは驚くべきことである。この事自体が、男性の支配する社会に女性が進出することの難しさを象徴的に示しているのではないだろうか。

本書の難点と言えば、作品が通時的に扱われず、19世紀後半から20世紀初頭という時代が一つの時代として扱われているため、その間の年月の流れの中の変化が見えない。歴史的に大きな変革があったにもかかわらず、たとえば職業観について変化があったのかどうかなどは見えてこない。しかしながら、様々な地域や様々な境遇の女性の生き様が描かれていて、あらためてアメリカという国の広さや多様性を実感させられる。一方、その多様性の中にも、女性であるがゆえの共通の悩みや当時の限界も見えてくる。しかもそれらの幾つかは21世紀の日本において、多くの女性たちが格闘しているものと、そう大きく変わっていないことに、読者は驚かされるであろう。これらの作品を読むことによって、それぞれ異なる苦境のなかで、格闘してきた主人公の人生を見ることは、たとえ自分の問題解決に直接結びつかなくても、解決への努力をする際の大きな力になるのではないかと思う。最後に、このような作品を紹介してくれた13人の女性研究者に心より感謝したいと思うのである。

(彩流社、2006年2月、本文276頁、本体2500円+税)